日本文学全集
25

舟橋聖一

ある女の遠景・木石
悉皆屋康吉・裾野

河出書房

舟橋聖一

カラー版日本文学全集　25

1969©

昭和四十四年九月二十日　初版印刷
昭和四十四年九月三十日　初版発行

定価　七五〇円

著者　舟橋聖一
発行者　中島隆之
印刷者　草刈龍平
装幀者　亀倉雄策

本文印刷　中央精版印刷株式会社
口絵印刷　凸版印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロース　日本クロス工業株式会社

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話・東京(292)三七一一(大代表)　振替・東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

舟橋聖一
ある女の遠景……五
木石……一五五
悉皆屋康吉……一七三
裾野……二六九

注釈　保昌正夫　三四九
年譜　長谷川力　三六六
解説　江藤淳　三七七
巻頭写真　三木淳
色刷挿画　ある女の遠景　佐伯米子
木石・悉皆屋康吉・裾野　仲田好江

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

舟橋聖一

ある女の遠景

ある女の遠景*

1

彼岸の入りになると、維子は叔母の墓詣りに、東京から二、三時間、のろい汽車に乗って、古風な城下町の小さい寺をたずねる。維子は、スピードのある電車や自動車に乗るよりも、一駅一駅、とまってゆくような乗物が好きだった。それに、維子は汽車に乗ったら、雑誌を読み漁ったり、毛糸の編みものをやったりしないで、只一心不乱に、窓外の景色を眺める。それには、天気のいい日にかぎる。速度のある急行に乗って眺めた景色と、普通列車の窓から見た景色とでは、同じ田畑でも森のある村社でも、小川の上にかかった土橋でも、小高い山の遠景でも、またその天地自然の中で、自転車のペダルをふんでいる若い男でも、三人連れの学校帰りの女生徒でも、まるっきり印象がちがうものである。維子はそういう車窓の印象を、一つ一つ、克明に楽しんでゆきたい。汽車が急に徐行し出すと、線路の近くを、ヒラヒラ舞っている蝶々とか蜻蛉とかが、何んと可愛らしく見えるものか。また、生きものではなくとも、線路のきわの黒土から、モヤモヤ炎え上っている陽炎などがいかにもノビノビと、心をなごめてくれる。そういう汽車の機関車は、少し上り坂になると、喘ぎ出す。ガッタン・ゴットン、ガッタン・ゴットンとやり出す。苦し気な音を立てて、何輛かの客車を引っぱってゆく機関車のリズムは、聞き飽きるということがない。そのほうが、野や山や澄んだ川のある田園風景には、ぴったりだ。目まぐるしい世間からは、半世紀ほどおくれている感である。また、そういう汽車のとまってゆく小駅は、至って旅情がこまかい。駅員の官舎が、ホームのはずれにつづいていて、その前に花壇があったり、棕櫚の木が植えてあったりする。黒焼に焼いた古枕木を利用して、溝に小橋を架けてみたり、錆びて役に立たなくなったレールを二本束ねたのを塀代りに使ってみたりしている。地下道も、跨線橋もない駅は、汽車が出ていってから、乗客は線路へ下りて、ホームからホームへ横断しなければならぬ。そういう山合いの小駅は、駅全体、一日に何本しかとまらない上り下りの発着を、みんなで働く楽しみにしているのがわかる。

――維子は伊勢子というこの叔母が、真実の母よりも、好きだった。それに伊勢子は、母の妹でなくて、父方の叔母である。母の姉妹は三人もいたが、維子にはなじめない。それに母方の伯叔母は、みな円満な家庭の主婦であって、子供も大ぜい出来、不自由のない暮しをしているが、伊勢子は三十そこそこで、あの世の人となってしまったからである――。維子とは十三年のひらきがあった。維子がまだ小学生の頃、伊勢子は、九谷の家の玄関口を入りながら、歯ぎれのいい声で、

「つウちゃん、つウちゃん」

と呼んだ。その声を聞きつける維子の耳も敏かった。伊勢子の声なら、一町先からでも、聞きそこねない自信があった。維子が八ツで、伊勢子は二十すぎだったから、ほかの女は維子の眼中にはいらなかった。伊勢子だけが、女の粋とも見えたのである。

「つウちゃんは、お伊勢さんに、段々よく似てくるようね」

と、母が父に話しているのを聞いたときは、うそ、うそ、あたいなんぞ、伊勢叔母さまに似る筈もない。あんな綺麗な叔母さまにと、否定はするものの、うそでもそう云われたのがうれしくって、その夜はいつまでも眠りつけなかった。

維子の父はもと、県庁の内政部の役人だったが、その後新しく出来

た図書館長に就任して、気楽な勤人生活を送っていた。いくつになっても、肥らないで、鼻下髭をたくわえていた。九谷脩吉といった。九谷家の総領で、若い時は、竹刀をもたせたら、滅多に人にゆずらなかった。父は妹の伊勢子を、眼の中へいれても痛くないほど、可愛がっていた。母がときどき、妬いたほどだったと云う。母が維子のことで、

「お伊勢さんに似てきたから、いいでしょう」

と、父をからかっているのを、聞いたこともある。父が身の上の大事を、母に相談する前に、伊勢子に話したと云って、母がカンカンになっていたこともある。然し、母は町家の出で、女学校も中退で、ろくな勉強もしていなかったから、父からその点で疎外されても、ほんとうは文句が云えなかったのである。父と伊勢子が、伊勢子の名の由来に関して、日本の古い歌物語*や三十六歌仙*の話などに興じると、母はシュンとなって、押黙っているほかはなかった。それに母は中年で、耳を患ってから、父の話が聞きとれず、父が欲しいものを取ってくれと云われても、間違ったものを出して渡して、父に剣突をくっている場面が度々あった。母は辛抱強いタチで、少々の剣突には、ビクともしなかったが、時々父が東京へ出かけ、文部省へ行ったり、図書の購入をしたりする帰り、土産に買ってくる呉服物とか手提類が、母のよりも伊勢子のものが多いのには、さすがに不満をかくせなかった。然し正直なところ、伊勢子に似合うものは沢山あったが、年よりずっと老けて見える母に丁度いいものは少なかった。そう云う母が、街の中央にある松山百貨店へ行くと、これもあれも、伊勢さんに似合いそうだというものばかりで、自分のにといって買ったのを、見たことがない。

伊勢子は父に似て、痩ぎすで、首は細いが、胸から下は、ふっくりしている。維子とすれば、母のお供で歩くよりも、伊勢子のお供がしたかった。

よく、伊勢子に手をひかれて、一の堀にかけた大手橋を渡って、二の丸にはいると、桜並木のある道を、本丸のほうへ、ぶらぶら歩いたものだが、八ツの春の維子は、まだ伊勢子の胸のへんにも、背丈がとどかない。いつでも、伊勢子の手は、ひいやりしていた。その手へ、美しい翅の蝶々が飛んでくることもあった。蝶々は伊勢子の肩へ、翅を休めることもある。それを払おうともしなかった。そういうときは、何かジッと考えこみながら、その並木道を歩いていたのだろう。

伊勢子は何ンでも、すぐ維子にくれた。ハンケチでも、手鏡でも、香水瓶でも、爪切鋏でも……。

「つウちゃん、これ欲しい？」

と訊き、維子がウンとうなずくと、惜し気もなかった。母には、ずい分、ねだっても、なかなか、くれない。ハンケチだけでも、伊勢子から貰うほうがずっと多くて、抽斗にいっぱいだった。その中には、「いせ」の二字を縫取りしたものもあった。母はそれを見て、人の名前のついたハンケチを使うのは、およしなさいと、咎め立てた。維子は母にかくれて、伊勢子のハンケチを、今でもこっそり、袂に入れることがある。

古い城廓の一部に、図書館があり、県庁があり、裁判所や商工会館があり、また陸軍の聯隊本部があったりするが、本丸付近から北西の一帯は、所々、小動物を入れた丸型の檻のある子供の遊び場になっていた。維子は父のために、弁当を届けに行った帰り、よくそこで遊んできた。本丸の中に、瓢箪形の小さい池があって、緋鯉が泳いでいた。池の汀に、ふと、伊勢子が立っていることがあると、維子はずっと下の、猿のいる丸檻のあたりからでも、

「ああ、叔母さま」

と、高い声で呼びつつ、その急な勾配を走り上って、息を切らした。なぜ伊勢子が、そんな汀などに、一人で立っているのか、その意味は知らなかった。

「図書館へ行きましょう」

「今、お弁当を届けてきたばかりよ」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

「もう一度、行きましょう」

伊勢子は汀をはなれて、青い苔のある坂を降りた。父のいる館長室の窓からは、いくつかの城門の甍をこして、その下に、城下街の南側の全貌が望まれた。父は気むずかしいので、届けた弁当が、カラになっていることもあれば、一箸もつけずにあることもある。フタをあけるなり、すぐしめてしまうのだろう。これには母が散々泣かされた。母もずい分気を遣うのだが、父が一ト目で、食慾を失うのも、わかる気がする。然し、母のつくった弁当が、箸もつけず、そのままになっているのを見るのは、つらかった。

「紋哉さんが、今までここにいたのだ」

と、そのとき父が云った。

「あら、そうなの。私は又、一時間も待ち呆けよ」

二人の対話は、維子の頭の上を、通りぬけた。維子はわざと、大人の話の圏外にいた。まだ自分は子供だから、大人の話はそらとぼけて、聞いても聞かない振りをするほうがいいと、子供は子供で、大人の気のつかぬ保身を心得ているものだ。それでも、紋哉という男の名を耳にしたのは、そのときが最初だった。子供心に、紋哉何者ぞと思ったのは、忘れもしない。

それから十数年後の今日、維子を乗せた下り列車は、天保の頃、古い藩主がこしらえたという名高い公園の下を、西から東へ走っている。維子は窓の外へ首を出して、思い出の残っている公園下の小道や、細い小川や段々に水の涸れてゆくS沼などを、うっとりと眺めずにはいられなかった——。汽車はこの沼のほとりを走るのが合図で、線路は街に近づき、やがてM駅*の構内へはいるのである。

2

伊勢子の墓のある誓山寺は、街の北側を流れているN川のほとりにあった。そこまではバスも行かないので、維子は街の中央道路を走っている路面電車に乗り、広小路で降りて、そこから鉄砲町をぬけ、俗称風呂下といっている部落から万代橋へ道を取ると、誓山寺の山門が見えた。山門の手前には早咲きの椿が五輪ほど花をつけていた。

そこをくぐると、十メートルばかりの石だたみがあって、もう一つ、中門がある。それをくぐって左へ折れると、一郭の墓地である。維子は、墓地の入口にある涌き井戸の前にしゃがんで、東京から手に持ってきた洋花を、一度水にひたした。井筒*は低くて、緑美しい苔がついていた。向う側に、丸い穴がぬいてあって、涌いてくる水はそこから外へ流れてゆくから、井筒のへりを越すことはない。フリージヤ、アネモネ、チューリップ、ヒヤシンス、君子蘭、スノー・ドロップなどの花々が、気のせいか、水に濡れると、パッチリと目をあけたように見えた。それから、袂をくわえて、維子は白い手を洗った。伊勢子の手も白かったが、維子もそれに負けない位だ。水に濡れたフリージヤの白も、みごとに冴えている。花をさげ、墓地と墓地のせまい小径をぬけると、

九谷家代々の墓

それにつづいて、半分ほどの大きさで、万成花崗*の墓石に、

九谷伊勢子

とだけ書いてあるのは、父脩吉の筆蹟だった。彼岸の入りとて、その界隈は、墓の手入れが行届いているが、九谷家の墓所は、荒れるにまかせて、掃除も一つ出来ていない。維子は花々を供える前に、ほこりにまみれた二つの墓を、洗わねばならなかった。伊勢子の墓に、花をおき、再び墓地の出口から、中門横の庫裡*の勝手口へ顔を出して、

「ちょっと、手桶を拝借させて下さいな」

と頼みこむ。何か手仕事をしていたその寺の肥った大黒*さんが、手を休めて、眼鏡ごしに、

「どなたでしたっけか」

「九谷の家の者ですわ」

「あれまア……お見それして……お墓さ、よごれて居りますけか」

「大分ね」

「そりゃ申訳ありませんけ……一昨日、どえらい風さ吹いてね。その前の日に、一度、きれいにしましたけが、またすっかり元通りになりましただ。今、水さ持って行きますべ」
「これさえ拝借すれば、いいンですよ」
「お嬢さまには、重くて持てますまいによ」
「ホホホ。そんなことないわ」
大黒さんが、やっこらさと立上る前に、維子は手桶をとって、もう一度、涌き井戸の前へもどると、口きり一ぱい、水を掬んだ。が、さて重い。維子は着物の裾をまくらねばならなかった。裾をまくれば、その下は、一越の長襦袢だが、旅に出るので、少し気が早いものの、袷をぬいで、ひとえにしてきたのである。その長襦袢までは、まくれない。となると、形ばかりは威勢がいいが、手桶の水をひっかけては何ンにもならないのだ。右の手に手桶を提げたら、左手を宙にうかしてバランスをとるのだと、母に教わったことがある。それで維子は、右肩ばかりさげないで、左の肩もふりながら、墓地の間を歩き出したが、二、三歩で、やっぱり、ビッショリ水を浴びた。長襦袢が濡れ、その下も濡れまたその下も濡れた。草履にも水をかぶり、足袋まで濡らした。
「ナンセンス」
と、彼女は云った。そのとき、大黒さんが追いついた。
「あれ、あれ、あれ。お嬢さまよ……長襦袢が濡れただか。だから、およしなと云ったにさ……あれ、足袋も——」
「足袋ぬぐわ」
維子は手桶を土におろし、墓の柵に手をかけて、足袋をぬいだ。片方だけぬぐわけにもいかないので、両方こはぜをはずして、素足になった。大黒さんの云う通り、墓守の爺さんにでも、水をはこんでもらえば何ンでもなかったのに。
「慾ばって、口きりいっぱい掬んだのが、悪かったのね」
「いっそ、両手にさげるほうが、こぼれんけ」

維子は伊勢子の墓から洗い出した。こんなに、泥やほこりを被っていては、さぞいやだろうと思うと、お先祖の墓より先に、洗い浄めたいのである。大黒さんも裾をまくり、短い腰巻をのぞかせた股をひらいて、墓のてっぺんから、水をかけた。その勢いで、墓は忽ち洗われていく。花立や香立の穴からは、水と一しょに、小虫の死骸や枯れっ葉が、ブクブク浮いてきた。この分では、一昨日の風の前に、一度きれいに掃除したという話は、眉唾だが、こうして洗い出せば、そんなことはどうでもよかった。とうとう、維子も跣足になって、墓を洗った水が、自分の足の甲を濡らすのが、却ってこころよいほどだった。大黒さんが維子の素足に目をとめて、
「冷たくねえけ。そんな跣足さ、なって」
「寒さ暑さも、彼岸までしょ」
「そう云いますけな」
彼女は濡れた墓標を、雑巾で拭きながら、背中合せの人の墓に、火のついた太い束の香を供えている檀家の老人にも、挨拶をした。その間に、維子は、掃除のすんだ墓から、洋花を供えていった。こんな素晴らしい花々に埋まると、早死した伊勢子が、この世に未練を出して、迷って出てきそうな気もした。
もう一ぱい宛、手桶に水を運んできた大黒さんは、
「まア何て、美事な花け」
と、目をむいて見せながら、花立の中へ、溢れ出るばかり、水を注いだ。
ひとりになると、維子は裾をおろした。足袋はまだ乾かないが、最後に濡れた足のうらを拭いて、草履をはき、水を流したあとの石だたみにしゃがんで、合掌した。どこからか汽車の音が聞えてきた。この汽車は東京とM市をつなぐ幹線ではなくて、八溝山脈に沿って、隣接するF県へ抜ける支線の音である。その鉄道は、いくつかの峠を上り、いくつかのトンネルに入らなければならない。この沿線には沢山の温泉がある。なぜ知ってるかというと、伊勢子がそこで病気にな

り、かなり重くなってから知らせがあったので、父と一緒に、維子が引取りに行った。そのとき、のろのろ走る汽車が、N郡からK郡にはいり、瓜連とか山方宿とか大子とかいう珍しい名前の小駅を沢山みた。そこから矢祭山の水源まで、蛇のようにくねるのが久慈川上流で、所謂奥久慈渓谷の風景は、小心な少女の胸を、ときめかした。矢祭山の向うが、東白川郡で、それより北へ、名も知れぬ温泉が、点在している。矢祭温泉、湯岐温泉、松の湯、湯の田、猫啼、母畑などと云うのの一つに、伊勢子が病み臥していた。

「どうして、こんな遠くまで、逃げこんでいったりするのだ。伊勢のために、みんな、どんなに心配したか。手数をかけるのも、ほどほどにしなさい」

と、そのときだけは、父もいつにない怒声を放った。然し、そんな山の中の心細い温泉宿に寝ていても、伊勢子の様子は、いつもと同じ、貴やかさを喪ってはいないのである。髪も束ねてあって、紫地のうずら縮緬の寝巻の袖から、さすがに痩せて、陶器のような二の腕が見えた。見舞に来た父の脩吉が、なぜ怒るのか、維子にはわからなかった。

「すみません。もう大丈夫ですから、兄さんと一緒におとなしく帰りますよ。大好きなつウちゃんまで迎えに来てくれたのだもの……これでは、御託は云えないわ」

「維子も来月から三年生でね」

「そうね。もう幾つ寝ると、三年生――」

お正月といわないで、三年生と替え、少し節付けて云った。夕方、床上げして、維子と二人で、名のみ囲いのある女湯へはいった。温泉は天然の岩かげから、こんこんと涌き、うす暗い電燈が一つともっていた。その岩に靠れて、山のほうを仰ぐと、大笹山、取上峠、花瓶山、明神峠などが見え、伊勢子がそれを一山一山指さしては教えてくれた。

裸になった伊勢子を、維子は前にも知っていたが、この矢祭山麓の温泉場で見た白い裸が、一番心にのこっている。あんまり、凝っと瞶めたので、

「何を見てンの？　つウちゃんは」

と、伊勢子は云った。維子は恥かしくなって、顔から火が出そうだった。何も云わずに、湯気の立つ温泉に身を投じて、向う岸へ行き、もう一度、八溝山の遠景へ、瞳を逸らした。

このときの伊勢子の病気が何ンであったか、むろんそのときは知らなかったが、あとで訊くと、それが最初の自殺未遂であったようだ。死の翳は、この頃から、彼女の五体を匍いまつわったのである。

三人で食卓を囲むとき、宿の古いどてらを着込んだ父は、一ト癖ある浪人者のように見えた。片膝を立てて、酒をのみ、

「伊勢……わしは泉中紋哉のような道楽者に、伊勢は勿体ないと思っているンだ。紋哉さんが、二郎丸と、きっぱり手を切って来ないことには、わしは伊勢を渡さんぞ……」

脩吉は図書館長になった頃から、酒が進み、酔うと搦みっぽくなった。維子は黙って、二人の話を聞いているうちに、伊勢子の好きな人が、道楽者ではあるが泉中紋哉というパリパリの軍需会社の社長だということが、呑みこめた。

3

三年生になっても、伊勢子は時々維子の送り迎えをしてくれた。髪を結ってくれたり、爪を剪ってくれたりもした。泉中紋哉に逢ったのも、その学校の送り迎えの途中だった。東京から着いたばかりの泉中が、街外れの工場まで迎えのプリムスを走らせてくるとき、大手橋の近くで、維子の手をひいた伊勢子を見かけて、車をとめさせた。

「送って上げよう。サア乗りなさい」

「いいンですよ、そんな」

と、伊勢子はためらった。

「遠慮しないで……この子が、君の何か……大好きな姪っこか」

「ホホホ。つウちゃん……泉中の小父さまよ……乗る」
「乗りたい」
と維子は答えた。登校の途中なので、維子はセーラー服を着ていた。維子が乗りたいというのを機に、ドアがひらかれ、二人は泉中の掛けている席の隣りに吸いこまれた。車はすぐまた、エンジンをおこして走った。
「なるほど、別嬪さんだな」
泉中は維子のアゴに手をかけるようにして、顔を覗いたので、維子は気持が悪かった。しつっこい小父さんのような気がした。
「そうでしょ。私に似てる？」
「似てるかな……誰が云うの」
「兄さんも、嫂さんも……」
「そうして、君が一々、送り迎えか。兄さんの命令かな」
「とんでもない。私が可愛くってたまらないから、送り迎えするのよ……兄さんって人は、そういう筋の通らない命令なんて、しません」
「わかった。つウちゃんも、この姉さんが好きなの？」
「一番好き——」
と、維子は泉中にふと敵意を炎やしながら答えた。伊勢子が訂正した。
「姉さんじゃなくて、叔母ですよ」
「そうか、そうか。然し、姉妹といったほうが、似つかわしいじゃないか」
「こんど一度、つウちゃんも、御馳走してね」
「よし、よし」
小学校は近かったから、車は走るせきもなかった。そこで降りた。
「明日の昼はどうだ。公園で逢おう。それから、いつもの鰻屋で、御飯をたべる。つウちゃんも一緒に——」
車の中から、泉中はそんな約束をした。伊勢子は校門の脇に立ったまま、泉中の車が、北三の丸から、田見小路のほうへ走り去るのを見送っていた。
「今日のこと、家の人に黙っているのよ」
「はい」
「泉中の小父さんのこと、どう思う？」
「知らない」
泉中は伊勢子が結婚する相手なのだろうと思うと、維子はいいとも悪いとも云わなかったが、別れてからも、泉中に対する敵愾心は捨てかねた。それでいて、明日公園でまた逢って、鰻を食べにゆくという約束には、心が亢ぶった。然し、ほんとうに連れてってくれるのだろうか。そして最後まで疎外されずに、いられるのだろうか。
校門を入ると、維子は泉中のことも、その泉中を慕っている伊勢子のこともすっかり忘れて、唱歌をうたい、遊戯に興じたが、あとになって思うと、維子がいたので思うことを話せなかった伊勢子は、明日の約束を待っているのも、もどかしく、維子を教室へ送りこむと、すぐ工場へ電話して、その日の逢瀬の段取りをしないではいられなかったろう。第一回の自殺未遂は、結婚の相手である泉中紋哉に、東京の赤坂芸者で、二郎丸という女がいて、向うもいずれは、商売をやめ、女房になる気でいると聞いたのが、動機だった。それがどうやら脩吉の斡旋で、二郎丸が手をひくことになるとやら、ならぬとやらのゴタゴタの最中だったにちがいない。
いつも、迎えに来てくれる伊勢子が、その日は迎えに来られず、女中のすぎが、校門に立っていた。維子はまた伊勢子に、凶変でもあったように、ふさぎこんだ。どう考えても、苦み走った泉中が、伊勢子をいじめつけるような気がしてならない。伊勢子が、白い細い首をふるわして逃げ廻るのを、泉中がどうしても、逃がさない。子とろ、子とろ*で、年嵩の鬼が、いくらみんなで庇っても、最後には一番うしろの子をつかまえてしまうように、結局、伊勢子はつかまって、維子の知らないどこか遠くへ連れ去られてしまう。伊勢子はそんな遠い知らぬ土地へ行けば、死んでしまうかもしれないと思った。こんどこそ、

矢祭山や取上峠のような高い山の頂上へのぼって、その雪渓に身を横たえていれば、霊魂はひとりでに、大空へのぼってしまう。そうしたら、伊勢子のあとを追って死ぬために、自分もあの奥久慈の山へのぼってゆく……。

さて翌日。維子は伊勢子につれられて、公園の崖下の、古い噴泉のほとりで、紋哉を待っていた。そこは老杉に囲まれた幽邃な感じのする場所である。維子は何ンとなく薄暗い、そういう場所を好まなかった。伊勢子の冷たい手をにぎりしめていた。

紋哉が杉と杉の間の道を降りてきた。珍しく、着流しで、畳の白い雪踏をはいていた。あとで考えても、よく、あんな風俗で、昼日中、公園を歩けたものだと思うが、戦闘機の重要部分を作っている軍需会社の社長だとすると、普通の市民が守らねばならぬ戦中の掟は、彼には必ずしもあてはまらなかったのだろう。それにまだ、戦争の様相は、末期的とは云えない頃だった。

泉中は細面で、姿がよく、着物がよく似合ったから、老杉を背景の書割にした新派の舞台のようにも見えた。伊勢子を見て、ニッコリした。

「待ったかい」

「ええ、少し……」

「よく来ましたね、つウちゃん」

と、彼は子供に対しては、却って少し、よそよそしくした。

「少し歩こう」

と云って、紋哉は先に立って、杉の中の小径をのぼったり下ったりした。公園の一番下には、やや広い道が、東京からくる汽車の線路と平行し、またその向うに、S川という小さい川が流れていて、その先がS沼になるのだった。泉が間断なく涌いている位だから、その辺はしめっぽく、土も草も、濡れていた。それでも、水たまりが出来るほどではないので、草履をはいた三人の散歩に不都合はなかった。――およそ二十分ほど、紋哉と伊勢子は、愉しそうに笑い興じ、またその間にも、小さい維子を、時々話題の中へ連れこんだ。が、いくらそのように気づかってくれても、維子はやはり、二人の世界からは、縁遠く置かれた小さい第三者であった。

「さアそろそろ、腹がへった。つウちゃんはどうだい」

踏切のところまで降りてきたとき、紋哉は維子のお下げをいたずらしながら云った。維子は黙って、その手を払いのけた。踏切には、遮断機が下りた。維子はここで、汽車が見たいと云った。それで三人は、遮断機のすぐそばに立って、汽車の通過を待った。

「下りか、上りか」

と、紋哉が問いを設定した。維子はすぐ、

「上りよ」

と云った。それに対して、二人は下りだと云い、どっちの方角に音がするかと、耳を聳立てた。

「お嬢さんのほうが勝ちですよ」

と、白い旗を出している踏切番のおかみさんが、相好を崩した。

「ほんとだ」

と、紋哉は上り列車の機関車が、すでに遠く見えだした東側を指さした。維子は、賭に勝っても、まだ気が重かった。いつもなら、三尺ほども飛上って喜ぶところなのに。轟音が近づき、枕木を揺りふるわせて、機関車の大きな前輪が踏切へかかった。青い帯が一輛、赤い帯が七輛半。そのあと先に、半郵便車と手荷物車がついていて、全部で十輛連結だった。その帯の中央に、上野駅という方向札が見えた。

「小父さま、こんど東京へつれてって……ねえ……お願い」

「今の賭に負けたからな……ほんとに行くなら、連れてって上げるよ」

「うれしい」

東京へ行けると思うと、維子は漸っと、さっきからの不機嫌が直ったのである。

三人はまた連立って、T神社の鳥居をくぐり、高い石段をのぼり出した。紋哉がまン中で、彼は二人の手を曳いていた。途中で一度ふりかえった。S沼が、ここまでくると一眸に見渡せた。この神社には、古い二人の藩公の霊が祀られていた。神前に額ずいた泉中は、大きな音たてて、柏手をうった。伊勢子は並ばずに、少し背ろに立ったまま、合掌したので、維子も倣った。

伊勢子が彼の耳に話しかけた。

「何を祈りごとしたか知ってて？」

「何ンだろう」

「心細いのね。二人が一緒になれますようにって、祈る外のことはないじゃありませんか」

「それに気がつかないとは、鈍かったな」

二人はさも幸福そうに笑い合った。

4

街のどまん中に、この市で比較的上級の花柳界*があって、その置屋や待合の重なり合うように繁昌している、これも中心地帯に、樺焼のうまい鰻屋があって、そこへ紋哉は二人をつれていった。父も鰻は好物なので、近所から、樺焼や丼をとることはあったが、ここの家のは食べたことがなかったし、まして維子は、箱*も入る料理屋などへ上ったのは、生れてはじめてだった。その日も、三人の上った二階座敷の真下では、昼から芸者に三味線を弾かせている客があった。もっとも、三味線といっても、静かに清元の権上を弾かせているのだが、紋哉は東京で、清元を習っているところから、すぐそれが、権上だとわかる風であった。然し伊勢子は、紋哉のそういう趣味を、あまり歓迎しなかった。

「今、弾いてるのは、ありゃア権上だ」

と云っても、

「あらそう」

と答える程度で、その音締に聞き入る様子もない。維子のほうが、却っていいなアと思った。

「こんな鰻屋さんでも、芸者衆がはいるンですかね」

と、伊勢子は怪訝な顔をした。やがて、樺焼が焼けてきた。黒塗の大きな重箱に三側に入っているのを紋哉は三つの皿にとりわけてくれた。

「私はこの通り、世話好きなんだよ、つウちゃん」

と紋哉は云った。鰻は肉があつくて、樺色に美しく焼け上り、テラテラ光っていた。まったくうまかった。この美味は忘れられなかった。舌の上へのせると、とろとろに溶けてくるようだった。

「おいしいだろう」

「おいしいわ」

「よかったね」

紋哉は、維子が忽ち一くし、食べてしまうのを、満足そうに見ながら、自分はお銚子の酒を、チビチビやった。女中が気をきかして、維子の分だけ、御飯を丼に盛ってはこんでくれたので、維子はよけい助かった。樺焼を上手にとって、丼の白い飯の上へおくと、うなぎ丼のようになった。それが食慾をそそると見えて、

「あたしも、そうして食べようかしら」

と、伊勢子が云った。然し、伊勢子も泉中の相伴で一ぱい二はいと、重ねるうち、いい色になった。それがまた子供の目には、何んと、あだっぽい色に見えたことか。

下の座敷では、仕置場の権八の台詞を、何度もくりかえしている。そこがよほど好きと見えてそこばかりやっていた。伊勢子が、

「つウちゃんは、食べ終ったら、その梯子段のところで、おハジキでもしていらッしゃいな」

と云った。おハジキなら、一人でも結構あそべる。鰻のあぶらで、テカテカに黒光りしている梯子段の上り口に坐って、維子は暫くの間、硝子玉のおハジキに余念がなかった。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com